

求めること、与えられること

マタイによる福音書第7章7-12節

7 求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。8 すべて求める者は得、捜す者は見だし、門をたたく者はあけてもらえるからである。9 あなたがたのうちで、自分の子がパンを求めるのに、石を与える者があるだろうか。10 魚を求めるのに、へびを与える者があるだろうか。11 このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとすれば、天にいますあなたがたの父はなおさら、求めてくる者に良いものを下さらないことがあるだろうか。12 だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。これが律法であり預言者である。

I 求めつづけなさい

7 求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。8 すべて求める者は得、捜す者は見だし、門をたたく者はあけてもらえるからである。

今朝の中心聖句である7節の言葉は、聖書を初めて読む人であっても、きっとどこかで聞いたことのある有名な言葉です。中学か高校の時の、「・・・しなさい(命令形)。そうすれば、・・・だろう」という英語の構文の例文に、よくこのみ言葉が使われていました。

ASK , AND IT WILL BE GIVEN YOU .

さて、この7節は、ギリシャ語の文法においては命令形現在で、継続の意味で訳されるべき文節です。

求めなさい → 求めつづけなさい
捜しなさい → 捜しつづけなさい
たたきなさい → たたきつづけなさい

祈りとは、2、3度祈ってやめてしまうものではなく、祈り続けるものなのです。それでは、祈りはいつまで続けられいいのか。それは答えられるまでです。

1. ある夢の話

ある人が天国に行ったという、夢の話を知っています。

天国に行ってみると、そこには大きなビルが建っていた。何の建物だろうと思い、中をのぞいて見ると、白い衣を着た大勢の人たちが、段ボールを抱えて忙しく働いていた。

「なんだ、天国も地上とあまり変わりばえしないことをしているんだなあ」

そう思い、忙しく働いている人をつかまえ話しかけた。

「このうず高く積まれた段ボールの荷物は何かですか？」

その白い衣を着た人とは、翼を持つ御使いであった。その一人が「よくぞ聞いてくれた」とばかりに答えた。

「この段ボールの荷物は、祈りの答えです。」

「祈りの答え？」

「そう、祈りの答えです。地上で皆さん方が祈りますと、『これこれのものを、地上の誰々にすぐに届けておくれ』と、神様から発注を受け、梱包し地上に届けに行くんです。ところが、届け先が不明であるために持ち帰り・・・この山のように積まれているのです。」

「何故、祈りの答えが届け先不明になってしまうのですか？」

「それは、祈り続けられないからです」。

この夢は、祈りは応えられるまで祈ることが肝心であるということを物語っています。

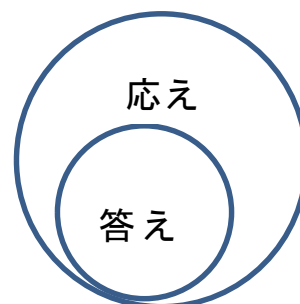
2. 良いものを与えられる

9 あなたがたのうちで、自分の子がパンを求めるのに、石を与える者があるだろうか。 10 魚を求めるのに、へびを与える者があるだろうか。 11 このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとすれば、天にいますあなたがたの父はなおさら、求めてくる者に良いものを下さらないことがあるだろうか。

求め続けるなら与えられ、捜し続けるなら見つかり、門をたたき続けるなら開かれる。つまりは、祈りは必ずこたえられるということです。ただ、こたえには、二通りの漢字の使い方があるように、神の応答にも二通りあります。

答え → 祈ったとおりの答え

応え → 祈ったものとはちがう答え



だれもが、願ったとおりの答えを願うものですが、願ったとおりにならない神の応えがあるのです。子どもがひもじい思いをしている時に、食物を与えない親がいないように、神もまた、飢える者の空腹を満たして下さいます。しかしながら、子どもが欲しいからと言って、親は何でも与えたりはしません。与えず、我慢させられたということが、後でふり返れば、それが自分にとってもっとも良いことだったと悟ることがしばしばあります。11 節には、悪い者であっても、わが子には良い贈物をするとあります。神もまた、それが安全なもの、健康的なもの、成長に役立つもの、善良なものであれば、万物を与えることさえ惜しまないのです(ローマ 8:32)。私たちが祈り求め続ける時に、神は、私たちの願い、思いをはるかに超えて、時にならないうちに、最善のものをお与えになるのです。

3. 祈りの強度

ここに「求める」、「捜す」「たたく」とあります。これは、祈り求める思いの強度を表わしています。

求める・・・口で、言葉で

捜す・・・歩いて、歩き回って、目を凝らして

たたく・・・手を門や扉に打ち叩いて

頭の中で「こうなればいいな」と思っているだけでは、祈りとなっていません。心の中で祈ることもよいのですが、声に出し言葉にして祈って、祈りは祈りとなってゆきます。さらに言えば、ここに「捜す」、「たたく」とあるように行動に表わして祈るならば、自分は神に何をさせていただきたいのか、自分の祈りの核心が収れんされて行きます。また、神が私に何を願っておられるのか、神の御旨に近づいて行くことができるのです。祈りが応えられてゆくために、神は私たちの側でなすべきことを指示されます。それは、しばしば他人の助言であったりします。そこに神の導きがあることを信じて行動する、あるいは自分のこれまでの考え方や態度を改めるのです。

祈りが答えられること自体、実は本当の目的ではなく、祈るプロセスの中で私たちが成長して行くことこそが本当の目的であり、神がもっとも願っておられることではないでしょうか。

Ⅱ 祈りから導かれる生き方

12 だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。これが律法であり預言者である。

これまで礼拝の中で、祈りに応えられる経験を豊富に持ちなさいという話をしてきました。生れたばかりの赤ちゃんは泣き叫んで親を呼び、その要求に応えられて行くことによって、人格形成のもっとも基礎となる「基本的信頼」が築かれてゆくと、発達心理学者のE・エリクソンは言っています。それと同じように、キリストを信じて信仰の産声をあげた人が、どんなことでも神に祈り、祈りが応えられてゆく

ことによって、神との基本的信頼が築かれ、神が確かにおられ、神が現実の生活の中に働かれるのを体験し、神が如何に自分を愛しておられるかを知るようになるのです。

そして、祈って応えられ、祈って与えられる経験をとおして私たちにもたらされる幸いは、他人に与えるということです。上掲のみ言葉が私たちに言わんとしていることは、神によって与えられ、神にやっていただいていた嬉しかったことを、他の人にもしなさいということです。

受けるよりは与える方が、さいわいである。 使徒行伝20:35

他人に与えることに、人としての真の幸いがあると、聖書は語っております。

しかし聖書には、人は例外なく、生れながらの罪人で、ひたすら自分のことばかりを考えていると言っております。人は与えることを知りません。余分にあつて気が向けば、他人に与えもします。また、他人に与えれば、何らかの見返りを求めます。

そんな私たちも、神に祈って与えられる経験を豊かに持つなら、神によって与えられた経験とその嬉しさを、他の人にも味わってほしいと心から願い、他の人に神からいただいたものを分かち与えたいと思うようになるのです。

神に愛された人は、他人を愛するようになり、神に無償で与えられた人は、他人に無償で与えたいと思うようになるのです。

新型コロナウイルス感染の拡大は止むことがなく、私たちは今、厳しい現実には立たされています。そのような中で私たちは思いわずらい、つぶやき、不平、不満をもらしたくなります。つい愚痴をこぼしてしまうことかもしれませんが、こういう時だからこそ、神に向かって祈り、祈り続けるのです。

神は私たちの思いや考えを超えて、祈りに応えて下さるのです。十字架をあおぎ、キリストを信じるなら、私たちは神の子とされるのです。本当の子どもであれば、神はもっとも良い贈物をお与え下さるのです。私たちの想像を超えて最善をなして下さるのです。私たちの心はもはや思いわずらうことなく、感謝にあふれるのです。

私は子どもの頃、「人様の迷惑にならないように」、つまりは、「他人にしてほしくないと思うことは、他人にするな」と教えられてきました。しかし、これからは、主イエス・キリストと出会うと、神が愛して下さったように、他人を愛し、神が与えて下さったように、他人に惜しみなく与える人生に導いていただきたいと思ひます。